

第20号 20円

昭和45年 4月25日

内容

春理と	もに	1
選会	セ	2
千人	ミ	3
こ	ナ	4
第	座	5
新	談	6
飯	会	7
田	を	8
大	振	9
学	返	10
私	り	11
学	同	12
者	セ	13
利	ミ	14
用	ナ	15
状	回	16
	間	17
	集	18
	い	19
	会	20
	飲	21
	年	22
	交	23
	会	24
	況	25

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511~2

〈東京事務所〉

東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

春の訪れとともに、大学セミナー・ハウスは、新しい途を往かなければならない。

創立以来、無から有をつくり出してゆくセミナー・ハウスの働きは、館長茅前先生を中心として、いくつかりかの先輩方の協力があって、わたくしが先生を知ったのは大学の評議会に列して、はるかに議長席につかれた当時の学長としての先生を仰いだときに始まるのであるが、先生のおられるところ、往かれるところには、おおらかさと、春のような暖かさと、そしてそのなかに貫く道理への厳しさがあった。これらが、そのままにセミナー・ハウスの姿勢にも反映していたことは、明らかなことである。

このたび、茅先生は館長の職を退かれて、増田四郎前一橋大学学長にその仕事を譲られた。増田四郎学長というより、わたしの長年の親しい先輩としては増田四郎さんであるが、増田さんが大学を卒業された直後から、わたしはいろいろと教え導いていただいていた。そのころ、わたしはまだ学生であって、中世史の史料を読むために、増田さんのおられた研究室に日参していた。増田さんは、ハンザ史料というむずかしいラテン語史料を精しく読み、整理を加えておられた。その端然とした姿は、わたしに学問の途のけわしさや厳肅さを、無言のうちにも示していたようであった。増田さんは、新しい館長として、茅先生の拓かれた途の上に、そして増田さんらしく、内容にも豊かさを加え、形式にも的確さを整えて、セミナー・ハウスの新しい途を切り拓かれてゆかれることであろう。

したがって、理事長についても交替があり、高村象平慶応義塾前塾長が就任されることになった。この場合にも、わたしの長年の親しい先輩としては高村さんと呼ぶべきである。というのは、わたしが、どうやら研究者の卵になろうとするころ、社会経済史学会が創立されたのであるが、その中心となられた大先生方に対して、高村

さんを始めとして、早大の小杉芳喬さん、入交好脩さん、当時法大の大塚久雄さんなどは、さしあたり、いまの言葉で言えば、造反派としてグループをつくり、研究会を始めた。増田四郎さんもそのなかの一人であり、わたしも文字どおりその末席に連っていた。だから、高村新理事長、増田新館長とともに経済史家であり、しかも長

その活動のためには、扇の要のようにすべてを働かせる軸であった飯田宗一郎専務理事の抱負と夢とは、なお生き生きと繰り出されてゆくであろう。セミナー・ハウスの生命は、この飯田理事の存在によって支えられるのであって、飯田理事に対しては心からそのご健在をねがいたい。

大学セミナー・ハウスが置かれている丘陵地帯は、いわゆる「多摩の横山」であり、多摩丘陵地帯である。

——赤駒を山野に放し捕りにて多摩の横山徒歩ゆかやらむ(万葉)

この短歌のなかにあるように、この丘陵地帯は牧場地帯であった。それも、在来種の小柄な日本の馬、そのころ関東地方に対して活発に営まれた植民活動の結果、大陸系の文化の高い移民集団がもたらした優秀馬もあった。高度の国際的な文化環境のなかに、新産業である牧畜が繁栄した地域であった。

この地域にセミナー・ハウスが設置されたことに、わたしはなにがしかの縁りを感じざるをえない。国際的な文化環境のなかに、若駒のように潑刺と、青年たちが育ってゆく場であってほしいのである。この近くに、古代には宮廷直轄牧場の「立野(たつの)」の牧がおかれた、という。はじめに掲げた短歌は、「立野の牧」の春をうたいあげている。

春とともこ

茅前館長に感謝し新陣容を迎える



理事・企画委員長
東京大学教授

松田 智雄

理事会

新年度に対応して
—
役員的人事と予算を講ずる

第一 理事長、館長の交代

昭和四五年四月一日就任
理事長 慶応義塾大学教授
高村 象平氏



館長 一橋大学名誉教授
増田 四郎氏



創立当初からの館長茅誠司氏が
辞任されたためと理事長増田四郎
氏が一橋大学長を辞任されたため
の二つの理由が重なって、理事長
および館長の改選が行なわれた。
新たに元慶応義塾長高村象平氏を
理事長に、前一橋大学長増田四郎
氏を館長に推挙し、それぞれ就任
された。

人的には、高村、増田の名コソ

●如水会館にて開催
●昭和四五年二月二日

ビであるし、組織的には、一人が
国立で一人が私立であるから、よ
く調和がとれる。創業時代には国
立の茅、私立の大浜という二人の
先生の名コンビで大きな貢献をな
さったのであるが、開館五周年を
迎える大学セミナー・ハウスは第
二期の充実時代にふさわしい陣容
が与えられたわけである。ことに
新館長の増田四郎氏は大浜信泉氏
の後任として昭和四一年一〇月一
四日付で理事長に就任され、今日
に至っているの、当ハウスのこ
とを知悉しているのみでなく、本
法人の目的と使命をよく理解され
た最適任者である。

第二 会員校の会費の改訂

現行会費 基本会費 100,000円
学部会費 50,000円

改訂会費 基本会費 150,000円
学部会費 70,000円

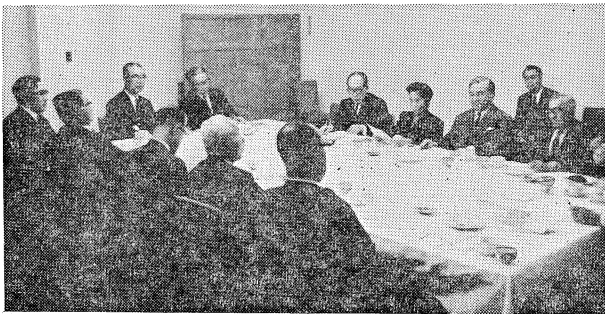
現行会費は昭和四二年度に値上
げたのであるが、その後施設の
増加と職員増員と人件費の上
昇、物価高による物件費の増額に
対応するためには、利用者の負担
にのみ頼るべきではないという立
場から、今年度は、会員校の年額

会費を約四割値上げし、四五七万
円の増収をはかることにした。

一方において、本法人の永続と
健全な経営を考慮することが肝要
であり、職員の適正な給与ならび
に定員を研究した結果、二千万円
の収入増をはかる必要があるとい
う答申もあり、公的な機関として
成長していく過程において、経常
費の収入源の問題は、今後の重要
な課題となった。

第三 常務理事会の設置

本法人の事業がようやく社会的
な評価を高くし、法人の存在がい
よいよ公共性をおびて来たことに
重要案件を議す理事会



かんがみ、専務理事の一人の能力
と仕事の分量を考慮し、その職責
の配分を合理化し、運営を円滑に
するため常務理事会を設けること
を決定した。

第四 昭和四五年度予算案

A 収入の部	
財産収入	500,000円
寄付金	700,000
会費 (現行会費)	10,500,000
事業収入 (泊・現行)	32,140,000
雑収	920,000
合計	44,760,000円

B 支出の部	
人件費	27,700,000円
諸費	14,300,000
建物費	1,100,000
業務費	3,390,000
備蓄費	2,840,000
予備費	1,000,000
合計	50,330,000円
差引不足額	5,570,000円
(会費増上金)	4,570,000円
に充てる	1,000,000円

● 理事・監事の改選と常務理事会の構成なる
● 茅館長、創業の任を完うして退任さる

● 理事会 丸の内銀行クラブ
● 昭和四五年三月二六日

この理事会は本年度最終の理事
会であったので、改選期に当たっ
ている役員の人選を行ない、また
常務理事会の構成を決定した。
ついで評議員の人選も行なった
ので、ここに新年度にはいる準備
はまったく完了したわけである。
評議員の構成は、会員校の代表者
三十六名、創立関係者六名、学界二
六名、財界二七名、計九五名とな
る。
なお茅誠司氏は館長辞任後も理

当日の出席者(敬称を省略)
茅誠司、大浜信泉、上代たの、
増田四郎、高村象平、加藤一郎、
春日井薫、中村哲、宮島竜興、加
藤六美、山田良之助、松田智雄、
団勝麿、中央大学総長代理、飯田
宗一郎



未来に希望を託す茅先生退任のご挨拶

業の基礎がこの七年の間にできたわけで、辞任に際し、増田理事長は席上理事会を代表して深甚な謝辞を述べられ、茅先生からは今後

選歴セミナー座談会

も変わることはない奉仕をするとの約束をされながら七年間の感想を述べられた。

A 理事

(昭和四五年四月〜四七年三月)

理事長 慶大教授 高村 象平

理事・館長 一橋大学名誉教授 増田 四郎

東大名誉教授 茅 誠司

早大名誉教授 大浜 信泉

日本女大名誉教授 上代 たの

東大教授 三輪 和雄

東大教授 松田 智雄

東京大学総長 加藤 一郎
○都立大学総長 団 勝磨
○明治大学総長 春日井 薫
立教大学総長 大須賀 潔
早稲田大学総長 時子山常三郎

○東京工科大学長 加藤 六美

法政大学総長 中村 哲

日本大学総長 鈴木 勝

東京教育大学長 宮島 竜興

○東大名誉教授 山内 恭彦

○早大教授 村井 資長

○東京工大名誉教授 三輪 和雄

東大教授 松田 智雄

専務理事兼事務局長 飯田宗一郎

B 監事 武蔵工科大学長 山田良之助

一橋大学名誉教授 田上 穰治

C 企画委員長 東京大学教授 松田 智雄

当日の出席者(敬称を省略)

茅誠司、上代たの、石館守三、

高村象平、増田四郎、団勝磨、春

日井薫、時子山常三郎、中村哲代

理、鈴木勝代理、飯田宗一郎、陪

席 佐藤喜一郎

永井セミナー開講

永井道雄先生が書かれた「自己への造反」(『中央公論』四月号掲載)の中にもあるように、当ハウスにおいて永井セミナーが開かれることになった。

開講の日どり、講義要項などは近く発表されることになるが、異色あるセミナーとして成果が期待されている。早くも学生たちの間では、このことが話題になっていようである。

●松本陽一(早稲田大学二年)

これは座談会での発言を要約したものである。出席者が大学共同セミナーに参加してこれた人たちであったため、議論が総じてそこに集中し、当ハウスの「未来像」を打ち出すには十分とはいえなかったが、中核である共同セミナーが、開館五周年に際して、その本質を問い直される契機となったことは、大きな収穫であった。しめくくりで山内先生が言われたように、ここがあまり大きな責任をかかえこむよりも、小さくても一つの使命に生き、その特徴を發揮するようでありたい。

●山内恭彦(企画委員会顧問)

このように小さなセミナー・ハウスが、学生のもっているあらゆる問題を解決できるなどという大それたことを望むのはおかしいと思う。だから、ここはここである性向をもった人が集まればよい。もちろん違った立場の人を排斥したりするのは悪いけれど、よその者を引っぱってこいというような議論はおかしいのではないか。ここはこの独特の形体でやっていくことである。それがここを特色づける理由でもある。

●吉田夏彦(東京工業大学教授)

科学技術文明が体制的なものとなって、いや応なしにわれわれを押し包んでくる。科学技術文明そのものが自己完結的になってくる現代にあって、それにどう対応していくか、単なる反体制反抗ではすまされない。そのような問題に

●芳賀 徹(東京大学助教授)

向上発展の陰には、一種の癖がある。これが、ある雰囲気をもっていいことは事実であろう。集まる学生の層、その分布がどのあたりにあるかを考えてみるのはよいが、違った場所には、また必ずからそれなりの雰囲気があるものである。ここが、きわめてオリジナルな活動をしていること、それが人間の原点を求め方向であること、私は感じとっている。これまでのセミナー・ハウスを乗りこえていく努力、ここで得たものを土台に、お互いにどんなかたちでせよ、また別のものを創り出していった方がいいのではないか。

●三根松子(日本女子大三年)

エリートイズムを粉砕しようとしていいる層も、セミナー・ハウスから遠ざかっているのではないか。何か人間をキッテ(限定)いるという印象を受ける。対立点をなくした対話は、ほんものではない。

●三根松子(日本女子大三年)

エリートイズムを粉砕しようとしていいる層も、セミナー・ハウスから遠ざかっているのではないか。何か人間をキッテ(限定)いるという印象を受ける。対立点をなくした対話は、ほんものではない。

千人会

支持者、各層に広がる
ご入会を感謝します

第9回報告 (申込順)

- A Ⅱ年額 一〇,〇〇〇円
- B Ⅱ年額 五,〇〇〇円
- C Ⅱ年額 三,〇〇〇円

- A 日本女子大女子教育研究所員 山本 和代殿
- C 中央大学講師 田中 拓男殿
- C 東洋大学助教 坂口 順治殿
- A 成蹊大学教授 木村 久男殿
- B 国立西洋美術館主任研究官 高階 秀爾殿
- C 式場病院医師 高橋 哲郎殿
- B 文部事務次官 天城 勲殿
- B 文部大臣 坂田 道太殿
- C 早稲田大学大学院生 武藤 英輔殿
- C 独協大学助教 高橋 正男殿

金拾万円を亡き奥様の香典返しにご寄付下さいました。
ご厚情に感謝し、ご遺族の上にご平安を祈ります。

下村 雄殿

入会の心を拾う

△貴財団法人の社会に与える眼にみえない力こそ、明日の日本の文化創造に大きな役割を果たすものと確信しております。

微力ではありますが、ご発展を祈る気持をこめて入会を申し込みます。

△五月六日の夕刊により、大学セミナー・ハウスの資金ぐりのため、千人会が結成されることをうかがいました。

私も何度か学生とともにそちらを使用させていただき、有益なセミナーをもつことができた教員として、ぜひとも協力したいと存じます。(上智大・H助教)

△忙しさに追われているうちに、今年ももう終わりなのです。先日、ボーナスが出ました。これで経済的な余裕が少しはできましたので、前から気になっていた千人会の申し込みをさせていただきます。本日は、一万円お送りさせていただきます。

△セミナー・ハウスでの研修や生活は効果も大きく、学生の精神生活面では一段と顕著なものを感じることができ、嬉しく存じております。貴所の皆様のご誠意の然らしむるものと御礼を申し上げます。第です。千人会のお誘いをいただき、私のごとき雑輩の入れていただくべきところではないと思いま

施設整備資金寄付者芳名

● 第11回報告

● 昭和44年8月～45年3月

● ご支援を感謝して拝受いたしました

- 五、四八〇円 日米学生会議殿
- 五、〇〇〇円 仙台市北山 林志乃殿
- 三、〇〇〇円 家族社会学セミナー殿
- 二、〇〇〇円 中渋谷教会殿
- 一、〇〇〇円 専修大学講師 松原成美殿
- 一、〇〇〇円 専修大学松原ゼミ殿
- 二、〇〇〇円 立正大学杉沢ゼミ殿
- 七、八四〇円 フェリス女学院大学 堀ゼミ殿
- 五、〇〇〇円 セントラル自動車殿
- 一五、〇〇〇円 文部省学生課 厚生補導研究協議会殿
- 一、五〇〇円 慶応義塾大学 池井ゼミ殿
- 四、一〇一元 学生自主共同セミナー(十月)殿
- 五九〇円 明治大学 牧野ゼミ殿
- 二、〇〇〇円 共立女子大学教授 小川文代殿
- 五〇〇円 滝ノ川教会学校殿
- 一、〇〇〇円 東洋電具社員 馬場孝悦殿
- 三、二四〇円 成蹊大学教授 宇野重昭殿
- 三、〇〇〇円 立正大学杉沢ゼミ殿

二、〇〇〇円 NHK取材班殿

● 特別指定寄付者芳名

- 【植樹】
 - 二、四〇〇円 法政大学 霜島ゼミ殿
 - 三、〇〇〇円 慶応義塾大学ITC殿
 - 一〇、〇〇〇円 日米学生会議殿
 - 三、〇〇〇円 亜細亜大学 馬場ゼミ殿
 - 一〇、〇〇〇円 語学教育振興会殿
 - 五、〇〇〇円 三菱金属鋁業殿
 - 二、〇〇〇円 日本印刷技術協会殿
 - 一〇、〇〇〇円 ジャパン・キャンパス・クルセード殿
 - 五、〇〇〇円 大学英语教育学会殿
 - 三、〇〇〇円 小平市小川町 高松松吉殿
 - 九、九〇〇円 第二五回大学共同セミナー殿
 - 五、六一〇円 第二六回大学共同セミナー殿
 - 一〇、〇〇〇円 東京大学名誉教授 山内恭彦殿
 - 六、五五四円 第二七回大学共同セミナー殿
 - 一、〇〇〇円 一橋大学助教 田内幸一殿
 - 五〇〇円 神戸製鋼社員 重森寿殿
- 【花瓶】
 - 六、〇〇〇円 大学英语教育学会
- 【図書】
 - 一、〇〇〇円 日本女子大学四年 村上博子殿
 - 二、〇〇〇円 日本印刷技術協会 松尾貞利殿

したが、ご主旨に賛同いたしました会員一人に加えていただきましたことを喜ばせていただきます。

(目白学園短大・N助教)

△先日は千人会入会のご案内をいただきありがとうございます。私も去年、ゼミの学生たちとご厄介になり、これからの大学教育のあり方について大きな示唆を得たことを懐しく想起しています。今後、セミナー・ハウスの果たす役割がますます大きくなることを信じ、かつ期待しています。

(東京大学・H教授)

個人的なおたよりですが、ここに転載させていただきました。たことをお許しください。



この1年を振り返って

IBP/UMのシンポジウム
風景(東大農学部主催)

当ハウスの利用実績は年を追って上昇の一途をたどっている。

本年度の宿泊延数の対前年度比は一三%、実数では四、五〇〇人の増加となり、とくに八月には五、〇〇〇人を突破する開館以来の最高記録となった。この一年間、一日平均延一〇八人の在泊者が、この丘でセミナー活動を展開したが静かな環境を保つためやむをえず利用をお断りする場合もあった。しかし、この五月にオープンする長期研修セミナー館により事情はかなり緩和されることになろう。

年間の利用状況を利用者別に集計すると、(表2)のようになる。会員校が多いのは当然のことであるが、非会員校その他にも門戸を開いて便宜をはかっている。利用の頻度の高い大学、ゼミナールを調べてみると、まず大学別

ゼミナール実施回数、慶応義塾大学五二回、東京都立大学四六回、早稲田大学三八回、東京大学二五回、日本女子大学二四回、上智大学二二回、青山学院大学二一回、中央大学二〇回、法政大学二〇回、一橋大学一九回、立教大学一八回。

〈表1〉 昭和44年度
月別宿泊延人員、ゼミ回数

区分	宿 泊 延 人員	ゼミの回数
4月	3,699(人)	73(回)
5月	3,404	54
6月	1,979	49
7月	4,976	66
8月	5,244	70
9月	1,674	54
10月	2,482	70
11月	2,710	69
12月	1,963	66
1月	1,945	68
2月	3,088	71
3月	4,713	84
計	37,877	784

愛子(東京女子大学)、武田昌輔(成蹊大学教授)、岡田純一(上智大学)

さらに、ゼミナール実施回数では、バストテンにはいらなかったが、比較の利用者が多く、五〇〇人を超えた大学としては、つぎの五つの大学を加えることができる。武蔵工業大学、東京学芸大学、日本女子大学、東京工業大学、津田塾大学

しばしばゼミナールをされた先生方とその回数は、つぎのようであった。

- 〈5回〉 吉沢頼雄(日本女子大学)
- 〈4回〉 野呂影男(慶応義塾大学)、杉溪一言(日本女子大学)、神保信一(明治学院大学助教)
- 〈3回〉 池上嘉彦(東京大学)、永井道雄(東京工業大学)、松田武彦(東京工業大学)、岩田一男(一橋大学)、吉谷龍一(早稲田大学)、村井実(慶応義塾大学)、飯吉厚夫(慶応義塾大学)、岩尾裕純(中央大学)、根岸

各大学の本格的な少人数のゼミナールの間隙をぬって、各方面の研修活動が行なわれるのも、当ハウスならではの点景である。以下、その主なるものを拾ってみることにする。

〈四月〜六月〉 新入生のオリエンテーションを行なった大学学部一四件、参加学生三、四五一名……、ゼミナールハウスも、新学期の雰囲気には包まれた。(ゼミナール・ハウス18号に既載) 七月、八月 休暇中でもあり、滞在日数の長い、年一度開催する多人数の集会がたてこむが、一方、海外からの学生も休暇を利用して来日するのなる。国際生活体験(EIL)、日米学生会議、世界学生キリスト教連盟、AFSと外人学生を主とする団体がリープインしたのに対

〈表2〉 昭和44年度
利用者別宿泊延人員、ゼミ回数

区分	宿 泊 延 人員	ゼミの回数
会員校	15,293(人)	459(回)
非会員校	6,664	108
大学連	8,498	41
大学会	2,692	26
社会人等	4,730	150
計	37,877	784

し、成蹊、成城、麗沢、千葉大学の英語強化訓練(ITC)、大学英语教育学会、松本亨英語研究会の語学研修グループが交錯し、期せずして、生きた学習場面が食堂や野外にみられた。一方、日本グループ・ダイナミックス学会、家族社会学ゼミナール、日本建築家協会建築学生ゼミナール、伝熱研究会夏期ゼミナール、地域開発センター、日本原子力産業会議等々、全国的な学会、研究会のシーズンでもあった。

〈九月〜十二月〉 首都圏協会、文部省主催の厚生補導協議会、留学生担当者研修会など規模の大きい集会から、会計検査院、通産省電気試験所の報告書の仕上げに泊り込むスタッフまで、官庁関係の利用が目立った。八王子ロータリークラブ、道徳科学研究会、日本山岳協会といった社会人の同好会、慶大東大医学部耳鼻咽喉科教室のジョイント・ゼミナール等も異色の団体の一つとして数えることができる。

同じように各大学のゼミナールも、ここに一つの教育の場を設定しつつあるのであり、あえていえば、大学紛争は、当ハウスの存在理由を、ますます明確にしたということではなかったらうか。(業務課の資料から)

〈一月〜三月〉 オレゴン州ルイス・アンド・クラーク大学二五名の二月二〇日から四月一三日に及ぶ長逗留と、全施設をフルに使って電算機導入を試みながら三月八日から一六日まで開催された国際経済商学生協会(AIESEC)の参加三五カ国による国際年次総会が、トピックスの白眉といえよう。また、二月には、学年末で、各大学のゼミナールが少なくなったため、通常はできるだけセーブしている会社、企業の合宿研修グループ一三件の申込みを受け入れている。

当ハウスの盛況を、大学紛争の余波と報道する向きもあったが、利用の内容をつぶさに見ると、「紛争の場を逃れて、ここで……」という理由でゼミナールは、きわめて僅少であった。

永井道雄教授による東京工業大学の一般教育の講義・演習、山下肇教授、芳賀徹助教授等による東京大学教養学部の総合コースの実験プログラムなど、むしろ紛争を契機として新しい大学教育のあり方が積極的に試みられ実践されていた。

第27回 大学共同セミナー

卒業セミナー

主題 ▲一九七〇年代の都市問題

——ニュータウンの再開発の検討——

■期日 昭和45年2月24、26日

国立公衆衛生院部長

鈴木 武夫氏

E 都市政策

——ロブソンの東京診断——

東京都立大学教授

赤木須留喜氏

〈参加学生〉

早大(九)、東京女大(六)、慶大

(五)、中大(五)、日本女大(四)、

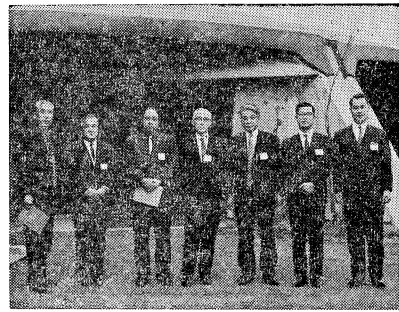
共立女大(四)、芝浦工大(四)、

国学院大(四)、東大(三)、神奈

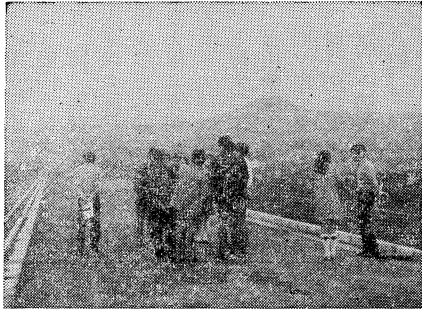
川大(三)、一橋大(二)、教育大

(二)、学芸大(二)、法政大(二)、

日大(二)、明治学院大(二)、東



指導された先生方。右から赤木、岡野、石原、磯村、高山、鈴木、飯田



多摩ニュータウン建設現場を見る

工大(二)、外語大(二)、立教大、青山学院大、成蹊大、津田塾大、ICU、拓大、国立音大、立正大、東京農大、成城大、東海大(各一名)、社会人一名。

◆主題の趣旨◆

世界の都市問題は、いまや大きな転機を迎えようとしている。都市問題はすでに都市のみの領域において解決することは不可能であり、あらゆる科学の総合のもとにおいて対応しなければならない。わが国の一九六九年の交通事故においては、ベトナム戦争に匹敵する死傷者を数えている。この一つの例からだけでも、対策の緊要がわかるであろう。

新しく都市計画法が実施されたが、大都市の周辺は、ニュータウンという名の開発につぐ開発で、空からみる日本列島は、土がその赤はだをさらけ出している。一方、都市の中心部は、再開発の名のもとにビルが高層から超高層へと空に向かつて伸びつつある。そこが、果たして人間が住む空間にふさわしいかどうか疑われるような変貌である。

セミナー・ハウスも、たまたま多摩ニュータウンの片隅にあつて、この都市化の波に洗われようとしている。こうした自ら直面する問題をふまえ、七〇年代の都市問題に対する実験セミナーを計画したが、ここで、混乱している多摩ニュータウン計画に、思いきつ

た共同提案もできよう。とくに四年生諸君には、このセミナーを卒業のはなむけともしたい。

◆セミナーの概況◆

今年も、卒業生を送る意味をこめて、学年末セミナーを実施した。昨年のこのセミナーでは、「大学と社会」という大きな主題で、現代を考えたが、今回は、やや視点を変え、現代の最大の課題の一つといつてよい「都市問題」をとりあげてみた。

個別の専門領域では扱いきれない複雑で多面的な問題でもあり、内容的にも水準の高いセミナーであるので、参加学生も三、四年生を対象としたが、二日目のシンポジウムの段階では、各自の問題意識は拡散した感じ、三日目のしめくくりの全体討議に至つて、ようやく演習の結果が集約され、討議が白熱するといったふうであつた。

演習は二つの全体講義——社会学によるヒューマン・サイドからの問題提起、フィジカル・プランナーの立場からのアプローチを軸に、交通・生活環境・レジャー・公害・行政の五つのセクション構成によつて行なわれた。大学共同セミナー名物の、ミッドナイト・セミナーを強行するグループも多く、多摩・千里ニュータウンの映画や多摩ニュータウンの現地見学などの番外プログラムは演習の疲れをいやす効果も生んでいたよう

である。最終日の昼食会は卒業生の送別パーティーでもあり、高山・岡野・石原・赤木の諸先生が饞けの言葉を贈られた。

今回の企画は、運営委員長の磯村英一先生のご努力に負うもので、同先生は二泊されたが、その他のセクションの先生方もそれぞれに一泊または二泊され、参加学生にとっては、まことに幸せな指導体制であつた。

セミナーの焦点となつた「ユニシティ論議」では、「青い鳥を求めて」というまくらことばが、好んで使われたが、あるべき都市の理想像を追求したこのセミナーの体験が、大学から社会へのかけ橋として、卒業生諸君の記憶に長くとどまることを念じた。

歌送に歌で応える卒業生たち——送別パーティーで——



新しい生活空間

東京大学教授
高山英華



高山英華先生

生活空間の中心は人間であることはいままでもないが、人間社会のとらえ方によって生活の意味が異なる。経済では生産と分配、消費というかたちでとらえられ、経済成長に対して生活優先という場合には身の回りの生活環境という狭い意味になる。私個人は、少なくとも都市や国家を考えると、生産と狭い意味の生活とを統一してとらえた人間の行動として考える必要があると思う。

次に私は空間を、地域とか広がりやを土台にした生活の場としてとらえる。地域とは二次元の平面的地域のほか、空中、地下あるいは海上、海底という三次元の立体的地域も含まれるが、いま問題にしたいのは、二次元の地域をどうとるかということである。われわれが現実生活している空間とどう実感を持つためには、東北や関東という地理的区分のほか、もう少し細かい地域を考えなければならぬ。都市と農村は、昔のように二次元的に取り扱えないように

なってきたというし、東京のような大都市になると、自分の行動している空間は非常に限られている。そういうことから複雑な巨大都市を統一的な生活空間としてどう考えるかが大きな問題である。

現在、道州制、府県制、広域市町村制といった地域のとり方が問題になっているが、経済、地方行政、軍事あるいは開発の手法、それぞれの見方で地域のとり方が異なるので、私は絶対的な区分はないと考えている。これだけコミュニティが発達し、人口、産業の流動が激しい国であると、国土全体をあらゆるかたちで使いこなすということまでできているわけだから、変に地域を区切って封じ込めるということには非常にむずかしい。そこで農村を含めた広域都市圏というかたちで、住民が自分の生活空間に広い意味の一として握れる範囲を基礎にし、それをいろいろ組み合せることができる計画単位がいいのではないかと思う。

さらに、私は生活空間を、時間まで入れた四次元で考える。今後、住宅産業に大きな技術革新がはいってくる、住宅を取り替えたり、大量生産する時代になるかもしれない。しかし大きな投資をし、造るまでに相当の時間を要する都市

や地域はそう簡単に変えられない。現在のように農業社会から都市社会への移り変わりの激しい時期に、安定した先まで処理するということは非常にむずかしいばかりでなく、現在を犠牲にして将来の町を造って何の意味があるか、という別の議論も出てくることになる。したがってある時期、ある社会に合ったものを造りながら、変化に応じて直していくというかたちをとらざるをえない。われわれ人間は死んでも新しい生命を次の時代に残しながら受け継いでいく。しかし不連続であって連続しているというこの自然の手法を、空間に取り入れようとしてもなかなかそうはいかない。そこが都市計画の非常にむずかしいところである。

では新しい都市をどう考えるか。都市の機能によって政治都市、交通都市、商業都市といった分類が行なわれており、それなりに重要な性格付けになるが、流通センター、管理中枢センター、ショッピングセンター、というように社会の産業機構の装置的な接点としてみる見方もある。それが複合していくという考え方で、専門化していくという考え方で、二つの考え方がある。前者は集積、接触の利益からみた大都市肯定論であり、後者は公害、騒音といった集積、接触から生じる不利益と、交通、通信の発達等からみて、研究学園都市、精密工業都市のように機能を分化させ、特化させたほうがよいという考え方である。

最後に自然と人工について触れたい。われわれは思い切った新しい技術革新を導入して、自然環境に対応する人工環境をつくる能力をもってきた。しかしそれが果たして人間に適当しているかという疑問があり、原子力発電がはいつてくると、もはや素朴な文明否定論を越えた問題である。非常に大きな自然の輪廻を相手に、都市は人工環境だという確信で未来都市を打ち出すいき方もあるが、われわれ日本人は、多少屋根が破れていても月を見れば風流だ、という発想で受けとめることもあるし、コミュニティという人間の魂を入れた生活環境ということも考え合わせた都市づくりでなければならぬ。

(第二七回大学共同セミナー 全体講義の概要 文責編集者)

- *「余録」(『毎日』44・5・15)
- *「未来大学を考える」(『朝日』44・5・29) に写真および写真説明で紹介。
- *「文相ここでも論戦——大学セミナー・ハウス視察」(『日本経済』45・6・12)
- *「新しい『大学像』を求め——坂田文相セミナー・ハウス訪れる」(『東京』44・6・13)
- *「大学セミナー・ハウス緑のアシス、ピンチ/周辺の宅地化激しく」(『東京』44・7・7)
- *「紛争休戦セミナーは満員/教授と泊りこみ勉強/五千人越し、六十組断る」(『朝日』44・7・30)
- *「緑のキャンパス」ピンチ/大学セミナー・ハウス」(『読売』44・10・9)
- *「大学セミナー・ハウス/台所は火のクルマ/募金予定も大きく」(『朝日』44・10・25)
- *「大学共同セミナーに参加して(学生・青木正22)」(『毎日』読者の広場44・11・8)
- *「門館四周年の大学セミナー・ハウス/満員お断りも/すでに二千三百回、十一万人参加」(『朝日』44・11・24)
- *「ここに大学あり/盛況のセミナー・ハウス/教授とひざつき合せる魅力」(『日本経済』45・3・26)

マスキンの眼

飯田専務理事の還暦を祝う集い

●セミナーの丘に友情溢れる●
昭和45年1月15日



(I) 還暦記念セミナー

一月三日に還暦を迎える飯田専務理事をお祝いするために、教授側から川原栄峰、鈴木皇、児玉久雄の三先生、卒業生からは久保育子、奥繁光、長松昭男、長島正、学生からは水野悦子、近藤雅世、吉田園子の諸君が発起人となり、記念セミナーが企画され、ここ四年間に親交を結ばれた教授、学生約八〇名が招かれた。京都在勤の馬場孝悦君、大阪在勤の藤本絃君など遠方からの来会者もあった。飯田専務理事は「大学セミナー・ハウスの体験の意味」と題する創立当時の苦心談のなかで、経験の積み重ねから理想と現実を一致させた具体的なあらわれが大学セミナー・ハウスであることを話された。

永井教授の「大学の未来を考える」講演では、まず当ハウスの成果を評価されてから、同教授の改

革的構想を発表され、聴衆を新しいビジョンのなかに連れこんだようであった。

ついで、早大川原栄峰教授が司会者となり、吉田夏彦、芳賀徹、宇野重昭、戸川芳郎、小川圭治、鈴木皇の諸教授に山内恭彦先生のご参加も得て、パネル討論を行ない、二時間半にわたって、明日のセミナー・ハウスのビジョンを話し合った。

当日の様子は一月二四日の毎日新聞に紹介された。

(II) お祝い晩餐会

午後六時半に開会され、飯田専務理事夫妻がケーキにナイフを入れ、高松松吉氏贈呈の赤ズキンと赤チャンチャニコが着せられると会場はいよいよお祝い気分が濃厚になる。山内先生という大長老教授の乾杯の音頭、藤井領子、伊藤修西君、土田業務課長の祝辞、谷村遙さんのヴァイオリン、大吉礼子さんの琴の演奏、卒業生代表の小林典子さんなどによる記念品の贈呈とつづき、最後に山内先生の謡曲で、楽しさいっぱいの集いは八時三〇分に終了した。

小林(旧姓平井)さんが、何を差し上げてもセミナー・ハウスで使ってしまうよ、お家にあるものもセミナー・ハウスに持ってこられるから、これは必ず自宅を使うことといって、美しい花瓶を「むつせみ会」から贈呈していたのが印象深かった。(写真は赤いチャンチャニコを着て一歳になった飯田専務理事)



の大学生活とセミナー・ハウス

▼卒業に際して一言▲

◇安宅 光雄

春休み中に上京して、「実存思想と現代」の共同セミナーにはじめて参加したのは三年前でした。川原先生のセクションでハイデッガーを読み、人間の尊厳に目を開かれる思いをしたものでした。樫山先生の「すべての常識を疑え」という言葉(正確な表現か否かわかりませんが)は、それ以来ずっとものを考える柱になっています。

セミナー・ハウスに集まる知識も経歴も豊かな方々は、僕が自分の周りをみて当たりまえと思っていたことでも、いかに狭くて特殊なことなのかを教えてくれました。自分の領域に閉じこもってすぐいい気になる僕にとって、何回かの八王子詣ではやはり「常識の破壊」の役を果たしたようです。人の意志と善意だけから出発して形になったものが八王子に行けば確かにあるのだと考えることは、一つの慰めになる気がします。

セミナー・ハウスが、学生と呼ばれる人になら誰にでも開かれた存在でありつづけるよう、願ってやみません。(東京大学工学部卒)

◇上野 一

僕とセミナー・ハウスとの出会いには専攻の歴史を通じてである。

はじめて経験した共同セミナーの印象は強烈で、歴史に対する僕のイメージは一蹴されてしまった。それが大いに反省の契機となり、勉強することの意味を感受した。そうして勉強の成果を試す意味で、自己の確認とでもいえるようか、さらに回を重ねることになった。

しかしセミナー・ハウスは自己の確認の場として、師友との比較、対決、啓発の場として、ユニークな存在であるけれども、それは一つの契機でしかないわけで、それから先は自分で探究していかなければならないのではないかと思う。(国学院大学史学科卒)

◇村田 嘉明

大学の夏季集中ゼミの合宿に利



永井道雄氏を激励する会に学生がコーラスのお祝い

去る二月で東京工大を辞し、新たに朝日新聞説論委員になられた永井道雄先生の新しい門出

用したのが縁となり、共同セミナーや諸種の行事に参加することになりました。なかでも三年の秋に利用したゼミの合宿で、同時に利用していた早大、都立大、学芸大、日本女子大のゼミナールと一緒に夕食の際、交歓会をもつたことが思い出されます。学問の分野、所属する大学は違っても、国公私立の枠を越えて他大学との交流の場が与えられたことはセミナー・ハウスならではのことでした。

二月の学年末セミナーの最終日に「卒業生を送る会」をしていたとき、八王子の丘を後にしました。今年も私の大学では卒業式は中止となり、卒業式は形式的なものと考えていた私にとっても、一抹の寂しさを禁じえませんが、飯田先生のよく言われる「諸君には二つの大学があるのだ」の言葉を思い出しての昨今です。(中央大学経済学部卒)

を励ます会が三月七日午後四時より東京プリンスホテルにおいて行なわれた。この会の発起人の一人である飯田専務理事の呼びかけで、当ハウスの学生奉仕グループ有志二名も出席して「喜びの日」の歌をうたい、花たばを贈るなどして先生の今後のご活躍を祈った。

なお、永井先生は、当ハウスにおいて「永井セミナー」を催され、今後も学生との接触をつづけられることになっている。

*新しい試み*学者の新年交歓会

昭和四五年一月三日

違った分野の学者が集って討論するという機会が少ない日本においては、学者相互の交流をはかる必要があるというところで、企画されたのが、今回の新年交歓会である。単なる宴会ではつまらないので、第一部に講演を設けそれについて意見を述べ合ったのである。

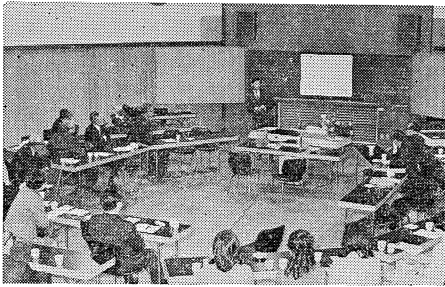
沖縄問題雑感 大浜 信泉氏
素粒子の最近の話 山口 嘉夫氏

世界経済の中の日本経済 川田 侃氏

講堂を会場として午後二時半開会。茅館長の挨拶について大浜先生の紹介がある。周知のように、大浜先生は、沖縄問題等懇談会の座長として、この問題とは宿命的に関係し、真剣に取り組まれ、沖縄返還を成功させた功労者であるから、われわれが知らないうら話なども表の話とともに語られ、広い知識のほどがしのばれた。

山口教授の紹介は山内恭彦博士によってなされ、すぐれた新進の素粒子学者として、最近の研究話題をスライドを用い、大きな数字がつぎつぎに示されるなかに、物質の究極を追求する巨大科学の現状が紹介された。

川田教授は松田智雄教授の紹介をうけて立たれたが、早くも六時



素粒子を語る山口嘉夫教授

に近く、十分の時間がなく残念ながら準備された講演をきくことができなかつた。今日の経済が思想的、哲学的省察を必要とするところまできているから諸科学の協力が必要であることを強調された。大学の事情もあって、参加者は必ずしも多くなく、一月も終わろうとするときのささやかな新年会ではあつたが、すばらしい講演者の顔ぶれ、夜の宴会における藤原鎮男東大教授の語、樫山欽四郎早大教授の哲学者の抱負をこめたセミナー・ハウスへの要望を兼ねたスピーチなど、インター・デザインプリン場のとしての当ハウスならではのなかなか新年風景であつた。

参加者のなかには創立当初の後援会長であられた三井銀行の佐藤喜一郎氏や大先輩の上代たの先生顔ばかりであつたが、主なる方々は左記のとおりである。

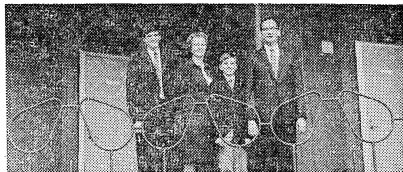
増田四郎、山田良之助、藤田健治、安藤良雄、久保田きぬ子、鈴木皇、今井淳、村田喜代治、松野賢吾、佐藤和男、鈴木竜二、吉田幸弘、武藤俊之助、石井直治郎、山本和代、多賀秋五郎、飯吉俊之助の諸氏。

利用状況

一月

日本心理劇協会 松村 康平
明治薬科大学教授 久保 忠道
上智大学教授 中山秀太郎

国立音楽大学教授	熊谷 孝	東京大学教授	野田 春彦
立命館大学助教授	畑中 和夫	中央大学講師	鳥崎美代子
東京経済大学助教授	向井 武文	日本女子大学助教授	宇川 和子
政治経済史学会第五部会	彦田 一太	中央酪農会議スクリーニング	
日本女子大学教授	一番ヶ瀬康子	玉川大学教授	戸川 尚
日本女子大学教授	杉溪 一言	東京都立大学教授	喜多川篤典
東京大学応用微生物研究所	落合 忠士	女子栄養大学講師	島崎美代子
亜細亜大学教授	赤木須留喜	東京外語大学助教授	板垣 雄三
東京都立大学助教授	藤井 かよ	明治学院大学助教授	高垣 勇悦
東京成徳短大講師	速川 浩	一橋大学小平祭実行委員会	
共立女子大学助教授	丸山 欣也	東京大学助教授	大須賀節雄
早稲田大学講師	染谷恭次郎	中央大学助教授	経塚作太郎
早稲田大学助教授	岡田 純一	白梅学園短大教授	田中 未来
上智大学教授	藤本三千人	お茶の水女子大助教授	
東洋大学助教授			長谷川 潔
日本印刷技術協会研修会			
トヨタオート横浜研修会			
帝京大学講師	粕谷 進	東京医科歯科大学教授	勝木 保次
滝ノ川教会学校修養会		立教大学助教授	高橋 昭二
日本地域開発センター		日本女子大学助教授	荒井 基
立教大学助教授	古沢 頼雄	立教大学助教授	大橋 泰二
山陽木材防腐研修会		一橋大学助教授	
一橋大学助教授			藤原 彰



Impressions of Life At the House

On April 13, 1970 the Lewis and Clark College Study will have completed six weeks as guests of the Inter-University Seminar House. Everyone here is friendly and cheerful which creates a warm atmosphere.

The accommodations and meals for students and faculty have been excellent. The location of the House makes an ideal place for serious study; there is very little distracting noise, and study facilities for individuals and groups are very good.

The diversity of student groups utilizing the House facilities is ideal for our purposes - learning about Japan. We have been able to make friends and talk to students and faculty from engineering, sociology, music, psychology, education, foreign language, and other departments within Japanese universities.

As the first "Opened University" in Japan, the Inter-University Seminar House has established a top-quality facility for the improvement of education in Japan. We are fortunate to have the opportunity to participate in the Seminar House activities and are confident of its success in the future.

Alan G. Robertson

カットは Alan G. Robertson 氏 (筆者) とその家族 6 週間の宿舎となった松下館で。

- 職業訓練大学校教授 宗像 元介
- 早稲田大学生産研究所 成蹊大学教授 宇野 重昭
- 日本女子大学英文学ゼミ 上智大学教授 根岸 愛子
- 日本ムーディ科学映画協会 東京大学助教授 笹刈 友一
- 玉川大学助教授 若槻 泰雄 東京医科歯科大教授 酒井 彦一
- 京王帝都電鉄研修会 東京教育大学学生文化会 勝木 保次
- 電気通信大学教授 国分 信英 早稲田大学教授 岩瀬 孝
- 日本大学助教授 平田 栄一 都立商科短大教授 島袋 嘉昌
- 東京女子大学教授 根岸 愛子 専修大学助教授 松田 信男
- 立教大学IT A 東京学芸大学教授 平山 輝男
- 目白学園女子短大教授 東京学芸大学助教授 松野 豊
- 片山 清一 青山学院大学助教授 古川 栄一
- 東京都立大学教授 三井 為友 東京外語大助教授 山之内 靖
- 慶応義塾大学 堀 野呂 影勇 駒沢大学美術部
- 明治大学教授 堀 淑昭 日産丸紅商事研修会
- 二月 天利 長三 青山学院大学教授
- 武蔵工業大学助教授 桑原 哲郎 日本電電公社研修会
- 東京女大短大部部长 光明 照子 国学院大学考古ゼミ一年生の会
- 京王帝都電鉄研修会 松下電器立川営業所研修会 立正大学教授 原田 鋼
- 日野自動車工業研修会 日本パブテスト連盟協議会 東京立正大学助教授 杉沢 新一
- 日野自動車工業研修会 一橋大学助教授 佐々木潤之介 東京工業大学助教授 荒木 峻
- 東京大学助教授 芳賀 徹 慶応義塾大学助教授 片桐 邦郎
- 成蹊大学教授 宇野 重昭 中央大学教授 浅野 栄一
- 茨城県立結城一高 長野ダイハツ自販研修会 日本国際学生協会研修会 早稲田大学講師 下森 定
- 青山学院大学教授 春木 猛 早稲田大学助教授 柴田 省三
- 新生活運動協会 明治学院大学助教授 山崎美貴子 新徳電気研修会 早稲田大学教授 小林 寛
- 東邦大学助教授 本吉 修三 光印刷研修会 政経史学会第五部会 彦田 一太
- 日本ルーテル教団伝道研修会 東京ジャーブ研修会 I B P / U M シンポジウム
- 日本レクリエーション協会 日野自動車工業研修会 松尾 孝嶺
- 日本原子力産業会議 東京大学助教授 佐藤誠三郎
- 中央大学英文タイプクラブ 上智大学英文タイプ研究会 白百合女子大学仏語劇研究会 アスター精機研修会 ルイス&クラーク大学(日本研究)
- 国際生活体験 A・G・ロバートソン L・C・ライト
- 三月 東京学芸大学教授 小林万寿男 早稲田経営情報学会 高木 純一
- 新徳電気(主任研修会) 青山学院大学第二部聖歌隊 田添 禧雄
- 東京女学館短大イペロ・アメリカ研究会 細川 幸夫
- 産業関係研究協会(ヤング・リーダー養成講座) 成蹊大学FAC電子計算機研究会 木村 久男
- 東京家政学院短大児童文化研究会 酒井 敏
- 日本大学助教授 笠井 芳夫
- 日野自動車工業(社員研修会) 中大法律科法友会 高窪 利一
- 立教大学教授 武沢 信一
- 東京立正大学助教授 左合 正雄
- 一橋大学現代社会研究会 日本女子大学助教授 天羽 大平
- 中央大学講師 田中 拓男
- 東洋大学講師 志摩 陽伍
- 法政大学助教授 白井 慎
- 都立商科短大助教授 塚本 利明
- 法政大学助教授 田沼 肇
- 酒類FACOM研究会 東京都立大学講師 児玉昭太郎
- 東京学芸大学助教授 松浦 孝作
- 早稲田大学助教授 吉阪 隆正
- 学習院大学シェイクスピア劇研究会 児玉 久雄
- 上智大学物理学科会(オリエンテーション準備会) セントラル自動車(管理者研修) 松本亨英語教育研究会(英語研修合宿)
- 関東学院大神学部・日本パブテスト同盟青年連合(B・Y・F)
- 上智大学助教授 柳瀬 睦男
- 東京都立大学助教授 清水 誠
- 東京都立大学助教授 小島 守生
- 中央大学助教授 竹村 猛
- 日本電信電話公社電気通信研究所(管理者訓練) 小笠原直幸
- 東京都立大学助教授 彦由 一太
- 東京工業大学助教授 松田 武彦
- 東京都立大学助教授 岡本 哲治
- 慶大青沼ゼミ(卒論レジュマ作成) 国際商科大学助教授 加藤 良三
- 光印刷東京事業部 独協大学講師 宮川 淑
- 東京家政大学助教授 大場 幸夫
- 中央大学助教授 小川浩八郎
- 国際経済商学生協会の(AI E S E C) 国際会議 明治学院大学助教授 増田 茂樹
- 中村産業(研修会) 学習院大学助手 中村 孔一
- 早稲田大学講師 松田 信男
- 早稲田大学助教授 大畑 弥七
- 明治学院大学基督教児童教育研究会 岡島 真理
- 日本印刷技術協会 明治学院大学グレンジーバンド

◆専務理事ノット

近頃方々でセミナー・ハウスという名前を見かける。セミナー・ハウスづくりが流行するとガソリン・スタンドのように各所に建つことであろう。私は必ずしもそうして風潮に異を立てるつもりはないが、模倣には創造性がない。安易な追随性は戒めたい。

やがてセミナーの丘は緑一色になる。グリーンは青年の色である。その風景のなかで芽先生の春風に感謝する集いが催される。春風一入さわやかである。人を植え、木も植えよう。

- 東京大学助教授 佐藤 幹夫
- 青山学院大学助教授 宇都本 章
- 早稲田大学助教授 車戸 実
- 早稲田大学商学部貿易学会 中央大学助教授 笹原 昭五
- 国立音楽大学助教授 熊谷 孝
- 早稲田大学コンピニーター研究会 早稲田大学日本文化研究会 木村 時夫
- 独協大学助教授 四宮 満
- 東大西村読書会 西村 秀夫
- 成蹊大学工業所有権研究会 紋谷 暢男
- 東京都立大学助教授 矢沢 大二
- 専修大学助教授 望月 清司
- A F S 日本協会 東京学芸大学助教授 多田 俊文
- 東京経済大学文化会